

学習成果の自己評価（保育学科）

保育学科では、学生の学習成果を量的・質的データとして測定する仕組みとして、直接評価（定量的指標）となる GPA 分布、単位修得率、資格取得率、退学・留年率、学位取得率、就職率、学習時間、教育・保育実習評価を実施している（備付-17）。また、間接評価（定性的指標）として、「保育学科学生アンケート」（1年生）、「学生アンケート」（1・2年生）、「卒業生アンケート」、学生による授業評価、雇用者へのアンケート調査等がある。「保育学科学生アンケート」（1年生）、「学生アンケート」（1・2年生）、「卒業生アンケート」では、学生による自己評価を2年間の学習成果として測定している。平成22年度に保育専攻では、「保育・教職実践演習（幼稚園）」の科目が新設され、「学習成果の自己評価」により、学生による自己評価を半期ごとに実施することとした。また、令和元年度から「学習成果の自己評価」の結果を一人一人に配布し、学習成果の獲得状況をフィードバックしている。さらに、平成30年度から学生自身による学習の達成状況を点検・改善するツールとして、ポートフォリオと一部実習科目においてルーブリック評価の導入を実施した。保育学科の教育目的・目標の達成に向けて、学生の学習の履歴と学習成果の蓄積などの情報を活用するポートフォリオや、評価する側と評価される側の認識が共有されるルーブリック評価を活用することで、学生・教員双方が学習成果の獲得状況を測定できるよう努めている。

保育学科では「学習成果の自己評価」を平成23年度から改善を重ねて実施してきた。令和3（2021）年度卒業生は、実習を経験する前のⅠ期：1年生の8月、Ⅱ期：1年生の2月、Ⅲ期：本実習を全て終えた2年生の9月（幼稚園・保育所実習Ⅰ・保育所実習Ⅱ・施設実習が概ね終了後）、Ⅳ期：就職活動を経験し保育実践研究を作成し終えた2月に、「学習成果の自己評価」を実施した。保育者に必要な資質能力についての自己評価で、＜人間性＞＜他者との協力＞＜コミュニケーション＞＜幼児教育についての理解＞＜保育についての理解＞＜子どもについての理解＞＜基礎知識・技能＞＜保育実践＞＜課題探求＞の9領域について4段階で評価している。

4：十分に理解（習得）できた 3：おおむね理解（習得）できた

2：理解（習得）に努力を要する 1：一層努力を要する

教育課程半期終了ごと自分自身の状況进行评估し、到達度を省察した結果は下記のとおりである。

次の表図には2020（令和2）年度入学生における上記4時点における「学習成果の自己評価」について検討した結果を示した。4時点の平均得点を比較すると、9領域全てにおいてⅠ期とⅣ期の平均得点を比較すると上昇している結果が示された。これらのことから、学生の自己評価として、2年間の学習を通して、ある一定程度以上の成果を獲得していることが示された。そして、これら4時点の分散分析を行った結果、Ⅰ期からⅣ期までの結果において4つのタイプに分類されることがわかった。4つのタイプそれぞれにおける4時点の平均評定値の変化過程はタイプにより異なっており、それぞれの時期の継時的変化の特徴ごとにタイプとして、図にまとめた。

それぞれの特徴は、平均評定値の4時点の変化は、Ⅰ期の自己評価が低く、Ⅱ期で上昇し、Ⅱ期からⅢ期にかけて伸びず、Ⅲ期からⅣ期にかけて増加する領域（タイプ1）、そして、Ⅰ期からⅣ期にかけておおよそずっと増加（Ⅱ期からⅢ期にかけてあまり上昇しな

った)する領域(タイプ2)、I期からII期で上昇、その後はあまり変わらず最初に増加する領域(タイプ3)とI期からIV期まで上昇や変化を大きく見せない領域(タイプ4)の大きく4つのタイプを推察する結果が示された。

まず、タイプ1は、「幼児教育についての理解」「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」の領域であった。I期の自己評価得点は2.62、2.63と低値であり、IV期の時点では3.07、3.08を示している。II期の時点でも2.90、3.00を示しており、1年次の授業において幼児教育や教科・教育課程といった基礎的知識について学び、保育そのものについて探求し学び理解しようとした学習の取り組みの成果が示された結果であると推察される。そして、III期における2.86、2.96という得点が示した得点減少は、2年次前期の実習活動を通し自らの課題と向き合ったことで自分自身が理解したと思い込んでいた内容に対する評価を修正し、振り返りを通して更に学びを深め、身につけようとした学生の姿が推察できる。

タイプ2は、「保育についての理解」「子どもについての理解」「課題探求」に關しての領域であった。どの領域もI期の自己評価から、IV期において大きく得点が上昇した領域(2.76⇒3.07、2.71⇒3.06、3.06⇒3.26)である。保育に關しての理解、子どもに關しての理解を深められていることに関する内容であるため、1年次の授業において取り組んできた反転型や協同学習の手法を用いた学びを通した学習成果の高まりについて推察できる。また、課題探求に關して、併せて保育実習及び教育実習での実践を通した体験的な学びにより、その学習成果は更に高められたことが推察される。

タイプ3は、「コミュニケーション」「保育実践」の領域であった。I期からII期にかけて上昇し、それ以降あまり変化しなかった項目である。1年次における学習を通して、学習成果を獲得し、それらがその後も維持された学生の姿が推察される。

タイプ4は、「人間性」「他者との協力」の領域であり、3.16⇒3.26、3.36⇒3.43と元々がある程度高位の得点であったことも理由として考えられるが、新型コロナウイルス感染症によるこれまでの行事や社会的な学習として取り組んできた学びが休止せざるを得ず、体験的な学習がこれまでと比較して少なく、これまでの学生と比較すると実践的な学びあいの機会が少なかったことが推察される。

領域における得点の平均の結果及び分析の結果から、2年間の学校生活においてある一定以上の学習の成果を得たことが推察される。その一方で、新型コロナウイルス感染症の拡大防止に伴う学習環境の変化(学内での受講授業のみならず、実習等の学外での学習も含めて)により、これまでとは多少異なる形での継続的かつ段階的な学習成果の獲得した姿が示されたことについても推察される。

学習成果は単純な直線増加的により生じるものではなく、時期や環境により獲得される経験の種類によって異なっているといえる。また、その時の学習内容や学習方法、経験する学びによっても領域におけるその成果は変化することになるといえる。自身の成長により理解できる事柄が増えることで新たな課題に気付けるようになり、成果の到達目標が変化することでより高められるとも言えるであろう。

こうした推察される学びと思考のプロセスを経て、学びを深める学生の姿が明らかになったことは、本学科におけるカリキュラムにおける学習成果の獲得が適切に行われていると同時に、「学習成果の自己評価」が適切に査定されていたことを示していると考えられた。

表 平均評定値の時期変化

領域		I 期	II 期	III 期	IV 期	F 値	多重比較		
		1年次 8月	1年次 2月	2年次 9月	2年次 2月				
人間性	平均 S D	3.16	3.16	3.20	3.26	0.76	平坦	4	
他者との協力	平均 S D	3.36	3.34	3.39	3.43	0.77	平坦	4	
コミュニケーション	平均 S D	3.15	3.37	3.43	3.43	7.24	***	I < II・ III・IV	3
幼児教育についての理解	平均 S D	2.62	2.90	2.86	3.07	10.78	***	I < II・ III < IV	1
保育についての理解	平均 S D	2.76	2.90	2.95	3.07	6.05	**	I < IV	2
子どもについての理解	平均 S D	2.71	2.91	2.95	3.06	7.36	***	I < II・ III・IV	2
教科・教育課程に関する基礎知識・技能	平均 S D	2.63	3.00	2.96	3.08	14.41	***	I < II・ III・IV	1
保育実践	平均 S D	2.61	2.96	3.23	3.31	25.88	***	I < II < II・IV	3
課題探究	平均 S D	3.06	3.20	3.23	3.26	2.45	†	I < IV	2

*** P < .001

** P < .01

† P < .1

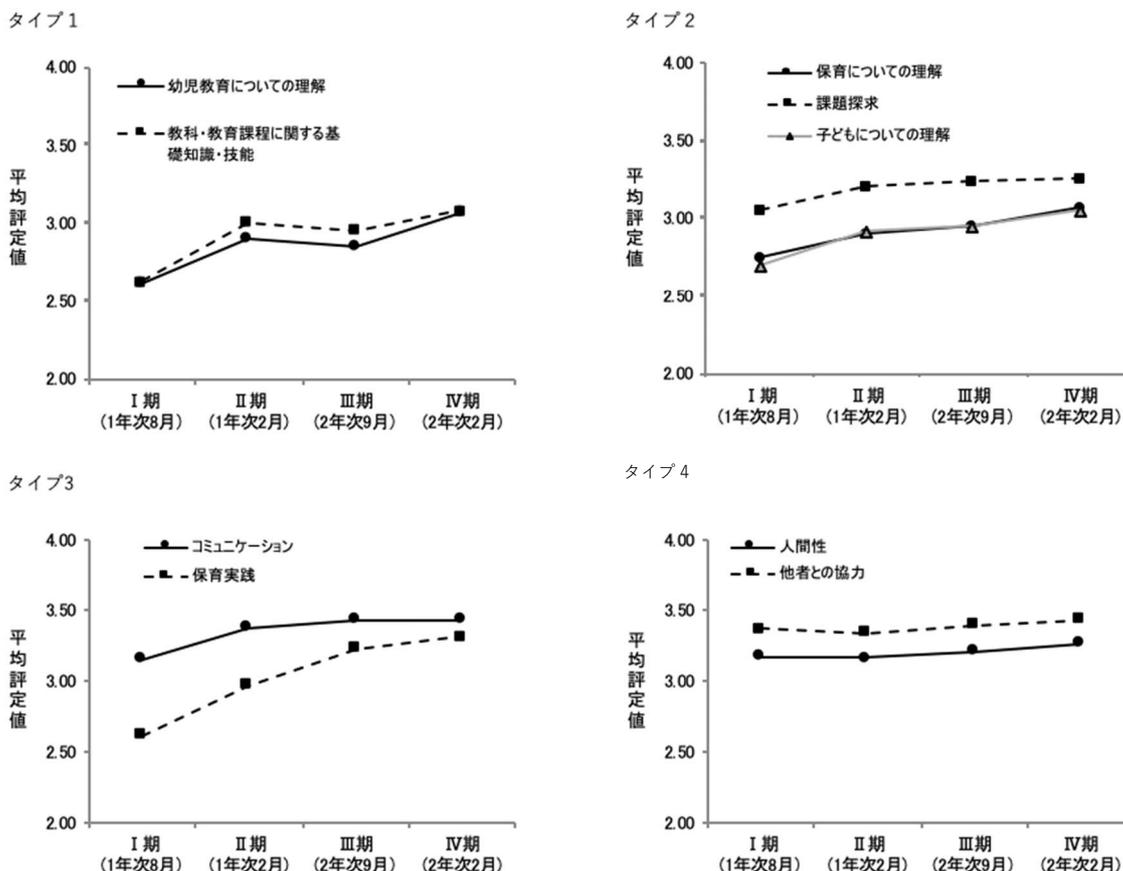


図 学習成果の自己評価の特徴的な変化

「学習成果の自己評価」から1年生のI期と2年生のIV期を比較し、下表に示した。全ての領域のIV期の平均評定値が3.0を超える結果が示された。各領域における項目についてみると、「幼児教育についての理解」における「教育の理念・教育史・思想の理解」「学校教育の社会的・制度的・経営的理解」の項目、「保育についての理解」における「保育の理念・保育史・思想の理解」「保育の社会的・制度的・経営的理解」の項目、「子どもについての理解」における「子どもの状況に応じた対応」の項目、「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」における「保育の指導法」の項目が評定平均値として3.0を下回る結果が示された。

これらの項目は、IV期の平均評定値はI期と比較すると上昇している結果を示しているが、I期の平均評定値が高い結果として示されているものではないため、学生にとって、もともとの課題として難しさを感じたりしているものであることが推察されるが、今後の課題として、より充実した学びの在り方について、検討することが必要であると考えられる。

そして、「人間性」の領域における「自分の行動特徴に関する自己理解」「向上心」の項目、「他者との協力」の領域における「他者意見の受容」「保護者・地域との連携協力」「他者との連携・協力」「役割遂行」の項目は、平均値の上昇がI期とIV期の評定平均値を比較したところ、ほぼ横ばい（他者との連携・協力は減少）であった。これらの結果について推察すると、「人間性」の領域に関しては、3.1点台の評価平均得点であり、横ばいを示していることから、学生が「自分の行動特徴への自己理解」や「向上心」を高めていくこと

ができるような学習者の自己肯定感を高めていく経験へと繋がる学びのプログラムの検討が必要であると考え。また、「他者との協力」の領域に関しては、I期での自己評価がもともと高値を示していたため、IV期での自己評価において、あまり上昇を示さなかったのではないかと考える。

その他の項目に関しては、概ね良好な学習成果の増加を示しており、本学科におけるこれまでの取り組みの成果が学生のにも自己評価として認識できるように結実した結果であるといえる。

表 1年生のI期と2年生のIV期の比較

項目	I期 (1年生8月)		IV期 (2年生2月)		IV-I	
	平均値	S D	平均値	S D		
人間性	自分の性格に関する自己理解	3.12	0.56	3.39	0.54	0.27
	自分の行動特徴に関する自己理解	3.13	0.55	3.18	0.58	0.05
	向上心	3.18	0.71	3.22	0.73	0.04
他者との協力	表現力	3.05	0.65	3.15	0.66	0.10
	他者意見の受容	3.58	0.52	3.67	0.52	0.09
	保護者・地域との連携協力	3.44	0.63	3.46	0.61	0.02
	共同保育の実践実施	3.08	0.69	3.36	0.63	0.28
	他者との連携・協力 役割遂行	3.68	0.54	3.60	0.56	-0.08
コミュニケーション	発達段階に対応したコミュニケーション	2.87	0.66	3.14	0.57	0.27
	子どもに対する態度	3.41	0.59	3.71	0.51	0.30
	公平・受容的態度	3.20	0.62	3.55	0.59	0.35
	社会人としての基本	3.12	0.65	3.30	0.56	0.18
幼児教育 についての理解	教職の意義	3.05	0.59	3.35	0.57	0.30
	教育の理念・教育史・思想の理解	2.43	0.64	2.88	0.60	0.45
	学校教育の社会的・制度的・経営的理解	2.40	0.60	2.97	0.56	0.57
保育についての理解	保育の意義	3.01	0.65	3.33	0.57	0.32
	保育の理念・保育史・思想の理解	2.61	0.66	2.93	0.60	0.32
	保育の社会的・制度的・経営的理解	2.65	0.55	2.96	0.55	0.31
心理・発達論的な乳幼児の理解	2.84	0.48	3.11	0.56	0.27	

子どもに ついての 理解	クラス集団の形成	2.72	0.61	3.13	0.59	0.41
	子どもの状況に応じた対応	2.56	0.78	2.94	0.64	0.38
教科・教 育課程に 関する基 礎知識・ 技能	保育内容5領域	3.01	0.61	3.29	0.55	0.28
	幼稚園教育要領・保育所保育 指針	2.52	0.65	3.07	0.58	0.55
	教育課程・保育課程の構成に 関する基礎理論・知識	2.39	0.56	3.05	0.56	0.66
	情報機器の活用	2.73	0.65	3.02	0.62	0.29
	保育の指導法	2.48	0.63	2.96	0.57	0.48
保育実践	保育構想力	2.26	0.86	3.20	0.56	0.94
	教材開発力	2.58	0.74	3.26	0.57	0.68
	保育展開力	2.91	0.84	3.42	0.55	0.51
	表現技術	2.70	0.68	3.35	0.57	0.65
課題探求	課題認識と探究心	3.19	0.62	3.40	0.62	0.21
	教育・保育時事問題	2.93	0.68	3.13	0.55	0.20